

『源氏物語』端役の「遺言」--紫上の祖母尼君の遺言を中心に

著者	山畑 幸子
雑誌名	清心語文
号	8
ページ	9-16
発行年	2006-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000262/

『源氏物語』端役の「遺言」

——紫上の祖母尼君の遺言を中心に——

山 畑 幸 子

一 はじめに

紫上は、『源氏物語』の女主人公として、また、光源氏の最愛の女性として、物語の大半に登場している。その紫上が初めて登場する「若紫」巻で、紫上の母方の祖母にあたる尼君の「遺言」が描かれる。紫上の祖母は、物語に登場する初めから「尼君」という設定がなされ、しかも、この初出の「若紫」巻で死という形で物語から退場する。非常に短い登場の仕方なのである。そのため、紫上の祖母尼君は、全くと言っていいほど人物論として問題視されることはない。それは、あまり登場の意味を持たない人物として考えられている、ということなのであろうか。

しかし、本稿では、この紫上の祖母尼君が、「遺言」まで残して退場することに注目し、物語における登場の意味を見出すことを試みたい。また、物語における必要性という視点から、作者の意図を探ってみたい。

二 紫上の祖父按察大納言の遺言

紫上の祖母尼君の遺言が描かれる前に、尼君の兄弟にあたる僧都によつて、紫上の祖父である故按察大納言の遺言が光源氏に語られる。紫上の素姓を明かす一つの方法であると考えられる。左はその記述である。

ア 「むすめただひとりしはべりし、亡せてこの十余年にやなりはべりぬらん。故大納言、内裏に奉らむなどかしこういつきはべりしを、その本意のごくもものはべらで過ぎはべりにしかば、ただこの尼君ひとりもあつかひはべりしほどに、いかなる人のしわざにか、兵部卿宮なむ忍びて語らひつきたまへりけるを、もとの北の方やむごとくなどして、安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん亡くなりはべりにし。もの思ひに病づくものと目に近く見たまへし」など申したまふ。(注1)

紫上の祖父(紫上の母の父親)は、娘(紫上の母)を入内させたい

と考えていた。ところが、紫上の母親は、父親（紫上の祖父）が亡くなった為に、入内どころか兵部卿宮の通い所、それも忍びの通い所にすぎない立場であつたことが明かされる。通常では、少女（後の紫上）を光源氏が手元に置いて育てるということは、考えにくいことである。しかし、それでも、このように物語を動かしていくためには、紫上の祖母尼君は兵部卿宮の経済的な後見でないこと、加えて、紫上の母親は既に亡くなつており、兵部卿宮との関係が疎遠となるような設定が必要であつたのだと考えられる。紫上が父親の兵部卿宮に引き取られたとしたら、北の方からどのような仕打ちを受けるのかは、想像するに難くない。紫上をめぐることは、継子譚の論理が利用されていると言われている。

作者は、その継子譚の論理を利用しながら、祖父大納言の遺言を明かすことにより、母親以上に厳しい状況にある少女がどのような結婚をするのか、そして、光源氏に発見された少女が、これからどのような運命を辿っていくのか、読者への問いかけをしているのではないだろうか。さらに、大納言の遺言を実行できなかったこと、その上、娘（紫上の母）まで亡くしてしまったことは、この僧都や尼君の残された親族の無念の思いとして表れている。この無念さを心の奥底に秘め、この後に描かれる尼君の遺言へと続いていくのだと考えられる。

三 尼君の「遺言」

光源氏は十八歳の春、癪病を祈禱してもらうために赴いた北山で、少女を発見する。左の引用は、光源氏の垣間見を通して描写される祖母尼君の様子である。

イ 中の柱に寄りあて、脇息の上に経を置きて、いとなやましげに誦みゐたる尼君、ただ人に見えず。四十余ばかりにて、いと白うあてに瘦せたれど、つらつきふくらかに、まみのほど、髪のうちくしげにそがれたる末も、なかなか長きよりこよなういまめかしきものかな、とあはれに見たまふ。〔若紫〕二〇六頁

ウ 尼君、髪をかき撫でつつ、「梳ることをうるさがりたまへど、をかし御髪や。いとかなうものしたまうこそ、あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとからぬ人もあるものを。故姫君は、十ばかりにて殿に後れたまひしほど、いみじうものは思ひ知りたまへりぞかし。ただ今おのれ見棄てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ」とて、いみじく泣くを見たまふも、すずろに悲し。幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたう見ゆ。生ひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えんそらなき

また、あたる大人、「げに」とうち泣きて、

初草のおひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えんとすらむ

〔若紫〕二〇七頁―二〇八頁

これら傍線部の記述から、尼君は患っており、しかも、末期が近いことが分かる。そして、この尼君が少女の唯一の後見であることも分かる。少女にとって唯一の後見である祖母は出家し「尼」となり、その上、患っている。その尼君が、自分亡き後の少女の行く末を案じている。加えて、この少女は、都に置いておけないほどの幼さである。

エ 「うちつけなる御夢語りにぞはべるなる。尋ねさせたまひても、御心劣りせさせたまひぬべし。故按察大納言は、世に亡くて久しくなりはべりぬれば、えしろしめさじかし。その北の方なむ、なにがしが姉妹にはべる。かの按察隠れて後、世を背きてはべるが、このごろわづらふことはべるにより、かく京にもまかでねば、頼もし所に籠もりてものしはべるなり」と聞こえたまふ。

〔若紫〕二二二頁

光源氏は、尼君の兄弟にあたる僧都からこの尼君の素姓や境遇を知らされる。尼君は紫上の祖父が亡くなってから尼になったことが分かる。そして、傍線部にあるように、尼君にとっては親族であるこの僧都が、唯一頼れる人物であったことも分かる。尼君の兄である僧都がいる北山に、そのような境遇の少女がいるのであれば、おかしくはない。そうした設定が少女になされている一方で、同時に、光源氏に引き取られるように方向付けがなされていると考えられる。

オ さて、いとうつくしかりつる見かな、何人ならむ、かの人の御

かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ。

〔若紫〕二〇九頁

そして、光源氏は藤壺宮への思慕によって、藤壺宮に似たこの少女を引き取って育てたいと思うようになっていく。この少女を後の正妻格として、物語に投入していることは明らかである。しかし、この時点においては、光源氏には、既に葵上が正妻として存在しており、したがって、この少女を後の正妻格に据えるためには、この時点で、少女は年齢的に幼くなければならないという条件が必要になるのだと考えられる。

カ 親王の御筋にて、かの人にも通ひきこえたるにやと、いとどあはれに見まほし。人のほどもあてにをかしう、なかなかのさかしら心なく、うち語らひて心のままに教へ生ほしたてて見ばやと思す。

〔若紫〕二二三頁

光源氏が藤壺宮を思慕しているということを利用して、藤壺宮と似ているという条件が、少女に与えられている。しかしながら、光源氏が、藤壺宮に似たこの少女に惹かれるという物語展開にするためには、容貌のみならず、藤壺宮の兄兵部卿宮の娘であるという血筋の上においても関わりを持たせ、条件を重ねておく必要があったのだと考えられる。さらに、後に光源氏の正妻格、また、女主人公として、物語に投入していくためには、光源氏と身分の釣り合いがとれるように、宮家の姫君としての設定も必要であったのだと考えられる。

その後、光源氏は、少女の後見を申し出た。そして、「もし御心ざし

あらば、いま四五年を過ぐしてこそはともかうも」〔若紫〕一二二頁

という記述に見られるように、四、五年経過したら、少女と結婚しても良いとする内諾を、尼君から貰っていた。それから間もなく、尼君は、次のような遺言を光源氏に残して、亡くなるのである。

キ 「乱り心地は、いつともなくのみはべるが、限りのさまになりはべりて、いとかたじけなく立ち寄せたまへるに、みづから聞こえさせぬこと。のたまはすることの筋、たまさかにも思しめし変らぬやうはべらば、かくわりなき齢過ぎはべりて、かならず数まへさせたまへ。いみじう心細げに見たまへおくん、願ひはべる道の絆に思ひたまへられぬべき」など聞えたまへり。

〔若紫〕一三六頁―一三七頁

この遺言の中には、父親である兵部卿宮のことは全く出てこない。引用アにあつたように母親の亡くなつた経緯と、兵部卿宮に引き取られた後の北の方からの仕打ちを考えると、尼君は兵部卿宮に少女を渡すつもりでないことが分かる。尼君は、光源氏に後見を委ねている。尼君にとつていかに頼るところがないか、墓をもすがる思いで光源氏を頼みにしているのである。尼君の遺言は、後に光源氏が少女を連れ出すことを正当化する一つの方法であつたと言えよう。しかし、この遺言は、この時点での結婚を認めたものではなく、「かくわりなき齢過ぎはべりて」という記述があるように、ある程度の年数を経てからという条件付きの形で、少女の唯一の後見であつた尼君が、光源氏との結婚を承諾しているのである。この遺言は、生前の内諾を再確認するも

のであると考えられる。

尼君の遺言は、先程示した祖父按察大納言の遺言の問いかけに呼応する形で、その後の物語展開を導いているものと考ええる。紫上の祖父按察大納言の遺言と祖母尼君の遺言とが二重の構造となつているのである。

こうした物語展開は、既に「桐壺」巻に伏線が敷かれてあつた。「さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな」〔桐壺〕四九頁、「かかる所に、思ふやうならむ人を据ゑて住まばや」〔桐壺〕五〇頁、これらの記述と対応するように構成されているとともに、紫上の設定条件に加え祖母尼君の遺言によつて、「若紫」巻で実現する形となつているのである。主人公光源氏の動向と尼君の遺言とが密接に関わり、物語を展開させていると考えられるのである。

しかしながら、光源氏に後見を委ねるのが目的であるならば、尼君を物語から退場させなくても、尼君の遺言だけでも物語を展開しているのではないかと、という疑問が浮かんできくる。それでも、少女の唯一の後見である尼君を、あえて物語から退場させているということから考えると、作者は、女主人公紫上を、光源氏しか拠り所のない女性として、つまり、光源氏の所以外にどこにも逃げ場のない女性として、既に初出の「若紫」巻で設定しているのではないだろうか。

少納言は、うれしと聞くものから、なほあやふく思ひきこゆ。やむごとなき忍び所多うかかづらひたまへれば、またわづらはしきや立ちかはりたまはむと思ふぞ、憎き心なるや。〔葵〕六九頁

ケ 我はまたなくこそ思ひ嘆きしか、すさびにても心を分けたまひけむよ、とただならず思ひつづけたまひて、我は我とうち背きながめて、「あはれなりし世のありさまかな」と、独り言のやうにうち嘆きて、

思ふどちなびく方にはあらずともわれぞけぶりにさきだちなまし
〔落標〕二九二頁～二九三頁

コ 同じ筋にはものしたまへど、おほえことに、昔よりやむごとく聞こえたまふを、御心など移りなはしたなくもあべいかな。年ごろの御もてなしなどは立ち並ぶ方なくさすがにならひて、人に押し消たれむことなど、人知れずおほし嘆かる。

〔朝顔〕四七八頁～四七九頁

クは、葵上没後に少納言の乳母が、光源氏に通い所が多いために、後に正妻になるような煩わしい女性が現れるのではないかと心配している場面である。ケは、明石君に姫君が誕生したことを知った紫上の嘆きの場面である。コは、朝顔齋院が光源氏の正妻になるのではないかとという噂を耳にした時の紫上の様子である。

紫上は、光源氏の多くの女性の一人としてどこまで生きていけるのか、また、子どももなく純粹に男女の愛情だけで結ばれている夫婦関係がいつまで続くのかを物語で試していると言われている。作者はこの「若紫」巻において、紫上を単に光源氏の最愛の女性としてではなく、その奥の内面の苦悩を描くことも見据えていたのではないだろうか。

四 「尼君」という設定の必要性

それではなぜ、紫上の祖母が、物語に登場する初めから、「尼君」という設定でなければならないのかということを考えてみたい。

尼君は遺言で、光源氏に紫上のことを「かならず数まへさせたまへ」と語っていた。既に葵上を正妻に持つ光源氏に対して、「かならず数まへさせたまへ」とは、どのような意味があるのだろうか。

「かずまふ」という動詞の用例は、『源氏物語』において二六例見られる^{注2}。人並みに扱う、という意味でいずれも用いられている。その内、使用されている状況が紫上の祖母尼君と酷似している例がある。それは、『落標』巻で六条御息所が残した遺言の言葉である。

サ 女もよろづにあはれに思して、齋宮の御事をぞ聞えたまふ。「心細くてとりたまはむを、かならず事にふれて数まへきこえたまへ。」

また、見ゆづる人もなく、たぐひなき御ありさまになむ。(略)とても、消え入りつつ泣いたまふ。

〔落標〕三一〇頁～三一一頁

点線部の言葉は、尼君の遺言の言葉と酷似している。そして、六条御息所は、この遺言に続けて「かけてさやうの世づいたる筋に思しやるな」〔落標〕三一一頁と、単なる「思ひ人」とはしないよう光源氏に釘を刺している。一人、娘を残して死に行く親心として、六条御息所の思いと尼君の思いとに共通するものが感じられる。その上、尼君

の場合は、残していく子（孫娘）は十歳くらいという幼さも加わっている。

したがって、尼君としても、単なる「思ひ人」としての扱いは望んでいなかったのではないかと考える。光源氏との身分差もあり、まして既に正妻のいる光源氏に対して、将来紫上を正妻にして欲しいなどという願いを口にできるものではない。しかし、紫上を正妻にの思ひは尼君にあつたはずではないか。作者は、口にしたくても口に出すことのできない尼君の精一杯の思いを、「かくわりなき齢過ぎはべりて、かならず数まへさせたまへ」という言葉に集約したのではあるまいか。

紫上の祖母尼君の遺言は、紫上の祖父按察大納言の思い、紫上の母の思い、さらには親代わりとしての尼君自身の思いとが重なつたものであると考えられるのである。加えて、「いみじう心細げに見たまへおくん、願ひはべる道の絆しに思ひたまへられぬべき」（「若紫」二三七頁）という遺言の最後の言葉は、紫上には、経済的な後見がないことを示唆しているのと同時に、出家しても、なお俗世への執着を捨て切れないうる尼君の苦悩の表現と思われるのである。紫上の祖母が「尼君」であるがゆえに、一人物のより深い内面を描き出すことが可能であつたと考える。こうした苦悩を描くためにも、紫上の身内に、祖母が「尼君」、祖母の兄弟も「僧都」といったように、出家した人物を設定しているのではないだろうか。

五 尼君の遺言の意義

尼君の遺言によつて、紫上を光源氏に託したことは、物語の進行にどのような影響を与えたのだろうか。

シ 例の、隙もやとうかがひ歩きたまふを事にて、大殿には騒がれたまふ。いとど、かの若草尋ねとりたまひてしを、「二条院には人迎へたまふなり」と人の聞こえければ、いと心づきなしと思ひたり。

〔紅葉賀〕三二六頁

ス 姫君は、なほ時々思ひ出できこえたまふ時、尼君を恋ひきこえたまふをり多かり。（略）一三日内裏にさぶらひ大殿にもをはするをりは、いといたく屈しなごしたまへば、心苦しうて、母なき子持たらむ心地して、歩きも静心なくおぼえたまふ。僧都は、かくなむと聞きたまひて、あやしきものからうれしとなむ思ほしける。かの御法事などしたまふにも、いかめしうとぶらひきこえたまへり。

〔紅葉賀〕三二七頁～三二八頁

セ 内裏より、大殿にまかだたまへれば、例の、うるはしうよそほしき御さまにて、心うつくしき御気色もなく苦しければ、（略）わざと人すゑてかしづきたまふと聞きたまひしよりは、やむごとくなく思ひ定めたることにこそはと心のみおかれて、いとど疎く恥づかくしく思さるべし（略）

〔紅葉賀〕三三二頁

〔若紫〕巻以後に、光源氏が尼君の遺言を思い出すといった場面は描か

れていない。しかし、傍線部は、尼君の遺言が光源氏の内面に少なからず影響を与えていると見られる記述である。少女（紫上）を二条院においたことは、光源氏と正妻葵上との関係を次第に疎遠にしている。尼君の遺言は、葵上との不和を徐々に加速させていく一因となっていると考えられる。そもそも、光源氏が政治的に成功を収められるのは、桐壺帝の庇護によるものであって政治的な結婚によるものではない。物語は、光源氏と紫上との純粋な愛のかたちの問いかけとして進行している。そして、引用シの直前に、「その夜、源氏の中將正三位したまふ」（「紅葉賀」三二五頁）と、光源氏の異例の昇進が記されているのである。

ソ 内裏にも、かかる人ありと聞こしめして、「いとほしく大臣の思ひ嘆かるなることも、げに。ものげなかりしほどを、おほなおほなかくものしたる心を、さばかりのことたどらぬほどにはあらじを、などか情なくはもてなすなるらん」とのたまはすれど、かしこまりたるさまにて、御答へも聞こえたまはねば、心ゆかぬなめりといとほしく思しめす。

（「紅葉賀」三三四頁―三三五頁）

この記述は、光源氏が二条院に女性を迎えたいという噂を耳にした桐壺帝が、光源氏を戒めている場面である。そのような戒めの場面であっても、桐壺帝は葵上を気に入っていない光源氏を「いとほしく思っている。桐壺帝の光源氏への溺愛ぶりがよく表れている。

物語は、この少女（紫上）の登場によって光源氏との関わりで新たな展開を迎えている。その一方で、光源氏がいかに公私ともに桐壺帝

の庇護下におかれているのかを強調し確認しているようにも考えられる。尼君の遺言は、正妻格としての女主人公紫上の物語、桐壺帝崩御後の光源氏の運命の変転といった、その後の展開を可能にするための布石の一つであったと言えるのである。

六 おわりに

「御法」巻の冒頭近くに、「みづからの御心地には、この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちにかけてどめまほしき御命とも思されぬを」（「御法」四九三頁）と、終焉を迎えようとする紫上の様子が記されている。紫上は、この世への執着を特に持っていないことが分かる。死への準備として出家しても何の問題もない。死を目前にして、この世に執着や未練がないことは幸せなことであると思われる。むしろ、理想的な出家ができるのではないかと考えられる。しかし、紫上は光源氏の許がないために出家したくてもできないことも描かれている。これは、「尼」となっても未だ俗世を断ち切ることができなかった祖母尼君の場合と全く正反対の状況である。

作者が、「若紫」巻の時点で、このような紫上の終焉を念頭に置いていたかどうかは、分らない。しかし、いかに生きるかを描くと同時に、いかに死を迎えさせるのか。作者は、人生の幕の閉じ方ということにも、焦点を当てていたのではあるまいか。このように考えた時、

紫上の祖母尼君の登場が短い理由や最初から尼君であるという設定理由も理解できるのではないだろうか。紫上の祖母尼君の存在および遺言に、そうした作者の意図が込められていることを読み取りたい。

注1 『源氏物語』本文の引用は、小学館『新編日本古典文学全集』による。

2 池田亀鑑『源氏物語大成』による。

(やまはた さちこ／博士後期課程三年在籍)